

1. エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。
2. その上に、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。
3. この方は主を恐れることを喜び、その目の見るところによってさばかず、その耳の聞くところによって判決を下さず、
4. 正義をもって寄るべのない者をさばき、公正をもって国の貧しい者のために判決を下し、口のむちで国を打ち、くちびるの息で悪者を殺す。
5. 正義はその腰の帯となり、真実はその胸の帯となる。

説教

イザヤ書 11 章からキリスト降誕の預言を学びましょう。

イザヤはイエスさまが生まれるより約七百年前の預言者です。紀元前 740~690 年頃に活動しました。イザヤの時代は暗い時代です。同胞の北王国イスラエルは大帝國アッシリヤに滅ぼされました。そして、アッシリヤは今度は南王国ユダめがけて襲いかかります。しかも、国家存亡の危機に際してユダの民は神に救いを求めるべきなのに、人々はまことの神ならぬ異教の偶像、死人の霊に伺いを立てていたのです。それで結局、危機と助けを何度か経験した後、紀元前 586 年、ユダはバビロンに滅ぼされるのでした。イザヤの叫びも空しく、ユダ王国は滅びてしまうのです。

しかし、イザヤはあきらめません。彼は神から直接啓示を受けた特別な預言者として、自分が活動しているユダ王国が最後は滅びることがわかっていたにもかかわらず、それでも希望を失いません。どうしてでしょうか。その滅び失せた先に、救い主の誕生を見たからです。

「エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。」(1) 「エッサイ」はイスラエル最盛期の王ダビデの父です。「根株から新芽が生える」とは変な表現ですが、根株しか残ってはいないということなのでしょう。「根株」の上にある「木」の主要な部分とは言えば、切り倒されたのです。ここでは、イスラエルの王国が「木」に喩えられます。神の恵みによって地上に植えられたイスラエルという「木」は、神の恵みを受けて地中に根を張り、地上にすくすくと成長し、大きく枝を張り、花を咲かせ、豊かに実を結びます。しかし、神への不信仰の故に、まずは半分に切り裂かれ、その大きな半分は切り倒されてしまいます。そして最後は、その残りの半分もまた同じようにぱっさりと切り倒されてしまうのでした。

こうして、パレスチナに植えられたイスラエルという「木」は完全に切り倒されて、消滅したかのように見えます。しかし、目を凝らしてよく見ると、そこには「根株」が残ってありました。確かに「木」は切り倒されたのですが、それでも「根絶やし」「根絶」はされなかったのです。神は「根株」を残してくださいました。そして、その「根株」から「新芽が生え」ます。「その根から若枝が出て実を結ぶ」のでした。前の 10 章では、大帝國アッシリヤは森林に喩えられました。生命力豊かで勢い盛んな森林アッシリヤは、結局バビロンによって跡形もなく滅ぼされてしまいます。そして、同じようにユダもまたバビロンに切り倒されて死に果てたかと思われました。しかし「根株」は残り、その「根株」から「新芽が生え」、さらには「その根から若枝が出て実を結ぶ」のでした。

「エッサイの根株」とは「ダビデ王の子孫」のことです。ダビデの王家はいったんは途絶えるものの、しか

し、そこから「新芽」が生え、「若枝」が出て、実を結びます。この「新芽」「若枝」とは、ダビデの子孫として生まれるイエスさまのことです。このイエスさまが「新芽」「若枝」となって地上に力強く成長し、大きく枝を張り、豊かに実を結ぶ世界の「巨木」となるのです。これが復興したダビデの王国、神の国、キリストの王国です。

ダビデの王国を復活させるイエスさまがどのようなお方か、2節以降で解説されます。「その上に、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。」(2) 此の方を一言で言い表すならば、「(天地を造り、支配する)主の霊がとどまる」方です。具体的には、物事の本質を洞察する「知恵」と、真理を見抜く「悟り」を持ち、事を実行するための戦略を立てる「はかりごと」、それを実行するための「能力」、そして、深く人格的に主を知るという「主を知る知識」、知る故に神中心に生きる「主を恐れる」生き様を意味します。事の本質を洞察し、見抜き、そこから戦略を立てて実現します。自分中心や他人本位ではなく、神を中心に、神と共に生きています。要するに、この世のあらゆるしがらみを飛び越えて大胆に神のわざを行う、それがダビデ王国を復興させるイエスさまなのです。

イエスさまについての解説が続きます。「この方は主を恐れることを喜び、その目の見るところによってさばかず、その耳の聞くところによって判決を下さず」(3) 「その目の見るところによってさばかず」とは、「外見によって判断しない、その人の地位や貧富によって差別しない」という意味です。「その耳の聞くところによって判決を下さず」とは、「人の噂や意見、世評にとらわれない」という意味です。来たるべき救い主は、「見た目」とか「聞くところ」には惑わされず、偏見なしに判決を下します。

それでは何によって判決を下すかと言えば、「正義をもって寄るべのない者をさばき、公正をもって国の貧しい者のために判決を下し、口のむちで国を打ち、くちびるの息で悪者を殺す。」(4) と言われます。「正義」「公正」によって「さばき」「判決を下す」のです。「さばく」という言葉は「裁判、判決、裁きの執行、さらには判例」を意味します。裁判と言えば一般の人はあまり馴染みが無く、関係がないように思います。でも、世の中、最終的には裁判で決着して決まっています。人を死刑にするのも裁判によります。

9月に国会で強行決議された安保法制も、これから始まる取り消し裁判で「違憲」と判断されたら無効となります。米軍基地が日本に存在することそれ自体が憲法違反であるという判決が出されて、時の日米政権が大きく動揺し慌てたこともありました。原発の稼働を差し止める判決が出たこともあります。結局は、政治的な影響を強く受ける上級裁判所で世の悪の勢力に押し潰されてひっくり返されることがほとんどですが、それでもごく稀に、こうした社会を揺るがす判決が出されるのは、その裁判官が「見るところ」「聞くところ」によって判決を下さず、単純に「寄るべなき(取るに足りない、助けのない、力ない、貧しい、気落ちしている)」貧しい住民の訴えを「正義」と法に照らして「判決を下す」からです。それは、正しいことは正しい、でも間違っていることは間違っていると正しく判断して言う、という彼らの真剣な努力によるものです。

見ただけで判断せず、人を恐れずに、何が事の本質か、何が神の前に正しいことかを洞察し、見抜いて、正しいことを実行することはこんなにも力あることなのです。貧しい人を助けます。寄るべなき者を救済します。

「主を恐れる」ことも「正義」も廃れれば、力ある金持ちと権力者がのさばるばかりで、力なき貧しい者は彼らに虐げられて、イスラエルのように滅びるしかありません。結局、国を立てるのは「神への恐れ」と「正義」です。「正義」を語るということが「国を打ち」、「悪者を殺し」て、彼らに虐げられている「貧しい者」を助けます。抑圧される者も被爆者も戦死者もなくなるのです。

「正義はその腰の帯となり、真実はその胴の帯となる。」(5) 「腰」も「胴」もその人の真ん中に位置します。「レビはまだ父(アブラハム)の腰の中にいた」(ハブル 7:10)という表現があるように、「腰」はいのちを生み出します。それをしっかりと引き締める「帯」は旅や戦の要となります。それが「正義」「真実」なのです。何が正義か、何が真実なことか、それが究極の裁判官イエスさまの思考と行動の中核にあるのです。

2006年、稼働中の志賀原発2号機について前代未聞の差止判決が下されました。井戸謙一裁判長(当時)

は、国策に逆らうこの大問題を、いつものように裁判官室で三人の裁判官が当事者の訴えを法に基づいて考え、議論し、結論を出し、それを文書にして言い渡す、そのようにできるだけ淡々で行うよう努めたと言います。勿論、様々な世の圧力と批判を覚悟しなければならないのはわかっているのですが、それでも、そういうことは考えずに、「自分が正しいと思ったことは貫かねばならない」と、法に照らして何が正しいことか、何が真実か、それだけを考えて協議して結論を出したと言うのです。こういう裁判官ばかりなら、今ごろ原発は一つも稼働できなくなって社会が変わると思います。

イザヤは、ダビデの王国が完全に滅びた後に、その切り倒された「根株」から「新芽」が生え、「若枝」が力強く伸びて豊かに実を結んでいく幻を見ました。王国を支配するのはダビデの子孫イエス・キリストです。イエスさまは、物事の本質を見抜き、ただただ正義を行って、神のわざをなします。そうして、神の国を建て上げていくのです。その国は二度と滅びることがありません。

なぜなら、イエスさまは見た目や聞くことに惑わされずに、神のみこころを行うからです。何が正しいことか、ただそれだけを考えて神のわざを行います。正しいことを語ります。みことばによって悪を滅ぼします。正義を抑圧する悪と戦い、悪を滅ぼします。このイエスさまが統治するので、王国は安泰です。終わることなく永遠に続きます。たとえどんなにこの地上に不義がはびこっても、その結果滅びることになっても、イエスさまの王国は永遠に続く、ここに世が移り変わっても揺るぐことのない私たちの平安と慰めがあるのです。